

金属熱処理業

全員金属熱処理技能士化計画、進行中

7-21 株式会社 中遠熱処理技研

企業概要

株式会社中遠熱処理技研は、静岡県掛川市に位置し、昭和 47 年創業の鉄系・アルミ系の多種多様な熱処理を生業とする企業である。同社の主な取引先は、ヤマハ発動機やスズキ、ホンダ系の部品メーカーであり、昨今の厳しい不況にも果敢に立ち向かっている。

同社は、平成 12 年から全員金属熱処理技能士化計画を掲げて技能検定の受検を推進してきた。

現在社員数わずか 24 名と少数精鋭ながら、1 級金属熱処理技能士 5 名、2 級以下金属熱処理技能士 6 名が所属している。



本社工場

技能士は会社の組織力の証

現在の高田社長は、先代社長の死後、32 歳で社長に就任した。先代の方が自分より技能が優れていたと感じていたという。しかし、個人として技能が劣っていたことを逆手にとって、「これからは全体的な“組織の力”でやらないといけない。」と考え、総合力で勝負することを考えた。そこで考え出したのが、「全員金属熱処理技能士化計画」である。

中小企業では独自に社内資格制度を持つことが難しいため、国家検定である金属熱処理技能検定に全員合格させることにした。基礎的な技術を全員に身に付けさせることが、会社の組織力の底上げにつながると考えたのだ。

まずは、社長自身が金属熱処理技能士 1 級を取得。社員に「俺も合格できたからおまえらもできる。」とげきを飛ばした。そして、年長者の工場長も技能士を取得し、会社全体に技能検定の受検を奨励していったのだ。

そして、現場だけでなく営業や総務部のスタッフも技能検定に合格し、会社全体に技能検定に向けた勉強をするという雰囲気を広げていった。

社内外のコミュニケーションが円滑に

同社の営業担当者のうち、2 名が技能士である。うち今回取材をした中村氏は 2 級金属熱処理技能士である。

2 級では実技が必要となるが、中村氏は普段はトラックで部品を納入することが担当であり、現場での熱処理業務を行うことはない。普段の業務では訓練できないが、自分で時間をみつけて技能検定試験の勉強を行い、3 年の年月をかけて 2 級の技能検定に合格した。現場社員から直接実技の指導を受けるなど、社内のコミュニケーションもより活発になったという。現場以外の技能士化の促進により、会社全体の一体感が醸成されたという。

さらに、技能検定合格により、納入先の業者との会話もより円滑に行うことができるようになり、顧客とのコミュニケーション向上の一助になったという。

現場以外にも技能士を育成することが、社内・社外でのコミュニケーションを円滑化しているようだ。

合格したら、即講師。合格後も勉強し続ける

同社では、受検者が確定する春頃に、指導側の技能検定合格者と技能検定受検予定者の懇親会を行っている。飲み会で受検者のやる気を促すような雰囲気を作っておけば、だんだん自主的に勉強するようになるという。

社内で定期的に勉強会を行っているが、その講師は社内の技能士を講師にしている。

たとえば、2 年目に 3 級を合格した社員に翌年、講師をまかせており、この社員は検定合格後も教えるためにかなり勉強し続けている。



高田社長

株式会社 中遠熱処理技研

- 業種: 金属熱処理業
- 住所: 静岡県掛川市蘭ヶ谷
- 代表者: 高田直由樹
- 設立: 昭和47年
- 従業員: 24名
- 技能士: 11名

技能士へのインタビュー

藤永 隆之氏（27 歳） 2 級金属熱処理技能士

中村 輝夫氏（55 歳） 2 級金属熱処理技能士



会社の雰囲気のよさが入社を決め手

大学で応用化学を専攻していた藤永技能士。熱処理業務が、応用化学と比較的近いということで同社に興味を持った。そして、会社セミナーで見た同社の雰囲気がフレンドリーだったことが、入社を決め手だった。

入社して 4 年間は製造現場に配属されていたが、昨年度より品質保証に関わる業務に携わっている。

技能検定について藤永氏は、「社長が全員金属熱処理技能士化計画という目標を掲げているため、受検可能であれば、全社員受検をして、合格することが暗黙の了解となっています。」と語っていた。藤永氏は 2 年目に 3 級、3 年目に 2 級を順調に合格した。来年度、1 級合格を目指している。

一方、中村技能士は同社に入社して 9 年目。これまで、業種は異なるがトラックの運転手として得意先に商品を納入している。

中村氏は現場での業務経験はないものの独学と社員の助けを借りて技能検定の勉強もしてきた。3 級合格後、土日に実技練習を重ねるなど 3 年がかりで、2 級技能検定に合格した努力の人である。

自分の携わった部品の活躍が一番の魅力

藤永技能士は、約 2 年前に静岡県内で有数の大企業のオートバイメーカーを訪れた際に、自分が製作に携わったフレームを見かけたという。このように、自分が携わったものが社会で活躍していること。これが一番の技能の魅力だという。

中村技能士は、「この会社の社員である以上、技能士資格はとらなきゃいけないもの。」と語っていた。

このように、自分が直接熱処理業務を行っていないものの、所属している自社のコア業務を理解することの重要性を強調していた。また、「目の前にあるものに対して、なんでも挑戦することは普通のこと。」とも語っており、好奇心の強さ、意識の高さが伺える。



藤永技能士の硬さ試験の様子

目標に向かって仕事をすることの大切さを実感

藤永氏は、技能検定そのものは直接的に役に立たないものの、目標に向かって仕事をすることに意義があると感じているという。

藤永氏は、3 級金属熱処理技能検定合格直後から、自身の 2 級技能検定受検の準備に加えて、3 級を受検する後輩の指導にあたっている。

藤永氏は、後輩への指導に際しても、彼らにどうやったら理解してもらえるのか、理解していることが確認できるか、指導方法の工夫に余念がない。本人が技能検定を合格するだけでなく、指導的立場に立つことによって学ぶことも多いのだろう。

中村氏は、技能検定受検に際して、現場社員からアドバイスをもらうなど鍛錬を重ねた。2 級金属熱処理技能検定は 3 回目で合格したが、2 回の不合格も「挫折したときは、自分を見つめられるときであり、失敗したときに自分は変われると思う。」と前向きに語ってくれた。

中村氏は、技能検定に挑戦したことによって、現場社員同士の会話がより理解できるようになり、コミュニケーションがはかりやすくなったという。また、これによって、より会社の一員という感覚が強くなったことも技能検定に挑戦して得られたものだそう。また、お得意さんを回る中で、自分でお得意さんからの質問にある程度答えることができるようになったなど、レベルがあがったと感じている。

中小企業としてトップレベルの品質を

今後の展望について、藤永技能士は 1 級を取得することと、自社の品質のレベルアップに役立ちたいと語っている。彼は、自分の今の業務について、「今はまだ町工場の水準かもしれないが、中小企業としてトップレベルの水準の品質保証をしたい。」と語っていた。

「社長は人をのせてやる気にさせるのがうまいので、社長にのせられているところはあるかもしれませんが。」と少し恥ずかしそうに話をしてくれたが、業務に対する高い意識を感じた。



藤永技能士の後輩指導